第２回　福岡市環境基本計画(第三次)策定作業部会　　議事要旨

日時：平成 25 年 11 月 19 日（火）　16:00～18:00

場所：アスロス福岡　608 会議室

１　出席者

(1) 委員	小出　秀雄	（西南学院大学経済学部教授）
	古山　通久	（九州大学稲盛フロンティア研究センター教授）
	平　由以子	（特定非営利活動法人循環生活研究所理事長）
	久留　百合子	（(株) ビスネット代表取締役／消費生活アドバイザー）
	藤本　一壽	（九州大学大学院人間環境学研究院教授）
	二渡　了	（北九州市立大学大学院国際環境工学研究科教授）
	松藤　康司	（福岡大学工学部教授）
	松山　倫也	（九州大学大学院農学研究院教授）
(2) オブザーバ	浅野　直人	（福岡大学法学部教授）
(3) 事務局	吉村　隆一	（環境政策部長）
	浦塚　一郎	（政策経営課長）
	原田　桂太	（温暖化対策課長）
	久保　祥三	（環境調整課長）
	弓削　なおみ	（循環型社会計画課長）
	調　浩一	（施設課長）
	中村　義治	（エネルギー政策課長）
	木下　和彦	（環境政策課長）
	中牟田　啓子	（環境保全課長）
	北島　保彦	（資源循環推進課長）

２　内容

(1) 開会

(2) 議事

① ふくおか環境市民カフェの結果について

② 第三次計画の骨子（案）について

(3) その他

(4) 閉会

３　提出資料等

【説明資料】

・資料１　　ふくおか環境市民カフェの結果について
・資料１別紙　ふくおか環境市民カフェ～ご意見の整理
・資料２　　環境基本計画（第三次）　今後のスケジュール
・資料３－１　第三次計画の骨子（案）について
・資料３－２　環境像とめざすべき環境の姿

【その他】

・福岡市環境基本計画（第三次）素案策定作業部会委員名簿・座席表

1.　開会

・事務局（環境政策部長）より挨拶。

・事務局（政策経営課長）より、配付資料の確認。

2.　議事

(1)　ふくおか環境市民カフェの結果について

〇事務局（政策経営課長）より、資料 1、資料 1 別紙に基づき、ふくおか環境市民カフェの参加者、意見の整理結果などについて説明。

委　員：まとめられているご意見は、計画策定にあたって大切にしてほしい視点のものであるか。また、別紙の網掛けの色使いはどのような意味があるか。

事務局（政策経営課長）：お見込みのとおりである。また、網掛けは、近い意味合いのご意見をまとめる趣旨で色分けしているだけで、それ以上の意図はない。

委　員：全体やグループのご意見の中における割合を示すことはできないか。

会　長：市民カフェの趣旨が自由な意見交換であり、個々にご意見の数も異なることから、定量的な処理は難しい。大まかな傾向をつかむ程度である。今回の市民カフェの感想としては、参加者の年代が比較的高い層に集中しており、もう少し若い層も入れた状態で実施できればなおよかった。

委　員：さまざまなレベルのご意見があがっているが、どのように活用する予定か。

事務局（政策経営課長）：広い視点のご意見については環境像やめざすべき環境の姿、より具体のご意見については施策などにキーワードとして活かすことを想定している。

委　員：全体的には、身近な環境の内容がほとんどで、街区・地域レベルの内容があまり見受けられないことから、今回のご意見のみでは偏る印象がある。

事務局（政策経営課長）：全てを今回のご意見で構成するわけではない。なお、11 月下旬に市職員によるワールドカフェも開催予定であり、浅野会長からご指摘のあった年齢構成のバランスがとれ、地域レベルでの意見交換がなされると想定している。

委　員：環境問題を担うのは若い世代である。学校のサークル活動として環境保全を行っているグループなどもあるため、このような団体を掘り起こして、ご意見をいただけるとよい。

事務局（政策経営課長）：若い世代に声がけしたものの、残念ながら今回はご参加いただけなかった。市職員によるワールドカフェである程度カバーできると考える。

委　員：今回はご参加いただけなかったようだが、U-30 実施団体も入って市民カフェが開催できるとおもしろいと考える。

(2)　第三次計画の骨子（案）について

事務局（政策経営課長）より、資料 2、3-1、3-2 に基づき、環境像とめざすべき環境の姿、骨

子（案）などについて説明。

① 環境像

会　長：事務局案では計画期間が 10 年と示されているが、地球温暖化の国の方針もある。2020 年 3.8%減は先日発表されたが、2030、2050 年の目標も今後出てくる。このような将来的なことも踏まえて委員のみなさまには考えていただきたい。

委　員：資料 3-2 の事務局が挙げたキーワードのレベル感がバラバラの印象である。

部会長：事務局案として示された、第二次計画の第 1 部、2 部にあたる部分を「計画の策定にあたって」で一本化すること、また計画期間を 10 年とすることはいかがか。

委　員：本格的には 2100 年にどうなっているかが重要で、その通過点として 2050、2030 年がどうなっているかというバックキャストの考え方でなければいけない。

部会長：長期的な視点も重要であるものの、一方で市の計画であることから、ある程度の割り切りも必要と考える。

会　長：行政計画であることから、10 年間の計画期間は妥当と考える。ただし、総合計画の後に策定するのではなく、以前のように環境基本計画を先に策定して、総合計画に反映させるような形に戻したい。

委　員　：今後の第一次産業を担う若い世代にとってわかりやすく、取り組むことのできる計画であってほしい。

委　員：環境都市ビジョンが 2050 年の将来像を掲げているのであれば、無視はできない。

委　員：ビジョンとは大きな方向性を示すもので、環境基本計画とは 10 年間の具体的な取り組みを示すものであると認識している。

委　員：「歴史のあるまち」で、「アジアとの国際交流が盛んである」特徴などは引き継ぎたい。人が移動する観点から、どの場所をどうしていくかという「まちづくりの視点」も大切にしてもらいたい。

委　員：市民の目線として、PM2.5 などの子どもに関わることになると敏感になる傾向があることから、「次世代の視点」を大切にしてもらいたい。

委　員：市のウォーターフロントや博多湾などの歴史を考えた際には、「海洋の視点」も加えていただきたい。「里海」という概念もある。

委　員：農林水産にも力を入れていることも本市の特徴である。

委　員：「山が近く」、「海も近く」、「市街地もある」という特徴がある。「エネルギーや資源の問題」は押さえていただきたい。

会　長：「山が近く、囲まれている」特徴がある。

部会長：それでは、やや先の環境都市ビジョンを見据えながら、10 年間の計画期間とすることでよいか。

（異議なし）

部会長：資料 3-2 のキーワードであると、福岡市らしさが足りない印象を受ける。環境の悪い面ではなく、よい面を出すこともあり得る。

委　員：キーワードとして、「元気になるまち」、「においがあるまち」などが挙げられる。

委　員：自分が住んでいた栃木や宮城、東京と比較して、「海の近さ」や「歴史が長いこと」が特徴として挙げられる。

事務局（政策経営課長）：第二次計画の環境像は普遍的な内容だと認識しているが、歴史などに関するご意見も包含された長期的なものとして掲げることができるか。

委　員：入れて欲しい観点としては、環境像の前文について、課題を列挙するのではなく、若い世代が夢を描けるような前向きな内容としてもらいたい。仕事場での内容にも踏み込める計画がよい。また、家庭に太陽光発電を積極的に導入しましょうと訴えるだけでなく、FIT による導入促進の影響で、系統に受け入れ余地がなく、調整が必要となっている現状の問題などにも触れてもらいたい。

会　長：大きな話も重要であるものの、市でやれることは限られるので、まち単位での取り組みとしては、地域熱供給などが考えられる。

委　員：環境都市ビジョンの将来像は、福岡市らしいキーワードがちりばめられていて参考になる。福岡市は「まちのバランスが良い」ことが特徴であると考える。

委　員：私も環境都市ビジョンの将来像の方がイメージしやすい。

委　員：資料 3-2 キーワードに挙げられている「譲り合い」とはどこからきている表現か。

事務局（政策経営課長）：浅野会長や藤本部会長とのお話し合いの中ででてきたキーワードである。

委　員：以前は強さを強調するような表現が流行っていた時期もあったが、現在は環境と対峙するだけではない表現も重要である。

委　員：個人の印象であるが、「ときを超えて」は残したい。「快適環境」は変更・削除したい。「人と自然」などを入れていただきたい。

会　長：第二次計画では、環境像とタイトルをつけているものの、実際のキャッチフレーズの内容はまちの将来像のようになっている。

部会長：例えば「住みやすい」など、人間がどう感じるのかが分かるようなシンプルなキーワードがよいと考える。環境像というよりも理念に近い。

委　員　：市民が環境施策を考えるのは、何かの問題に直面した時である。「自然とともにある」ことなどが入るとよい。

委　員：本計画の像が環境都市ビジョンの将来像と同じであるならば、整合を図らなければならない。

事務局（政策経営課長）：わかりやすいキャッチコピーを掲げて、課題ではなく前向きな前文とするように検討したい。次回作業部会で案を提示したい。

② めざすべき環境の姿

委　員：「快適で良好な生活環境の姿」の中には、ヒートアイランドや気候変動から、モラルや生活マナーまでを網羅することになるか。

事務局（政策経営課長）：お見込みのとおりである。環境都市ビジョンの構成を踏襲している。

委　員：今回の案の方が第二次計画よりも分かりやすくなった印象がある。ただし、細かく確認した場合には、景観や歴史などをどの分野で扱うかといった課題はある。

委　員：3 分野は「社会」となっているので、「快適で良好な生活環境の姿」のみ「環境」となっているのは違和感がある。

会　長：「社会」という表現と、「めざすべき環境の姿」という見出しが合っていない。どちらかに揃える必要がある。

委　員：事務局の骨子（案）では、「現状把握」がどこで扱われることになるか。

事務局（政策経営課長）：「策定にあたって」の「前計画の進捗の検証」や「社会背景等の変化」の部分で扱うことを想定している。

委　員：4 つのめざすべき環境の姿に矛盾はないか。どちらかを優先するとどちらかが悪くなるような関係があるならば横断的な施策で不具合が生じる可能性がある。また、インフラや街区に関わるような内容は「分野横断的な施策の展開」に入れた方がよいと考える。

会　長：まちづくりだけであればそれでもよいが、環境施策であることから、各局の施策に活かされるものでなければならない。

委　員：一方的な市からの施策の押しつけのような印象を受ける。市民の意識づくりが大切である。

会　長：各局向けなのか、市民に行動をお願いするものなのかといった、本計画は誰にあてたものであるかの前提整理が必要である。「分野横断的な施策の展開」には、市民に環境関連の啓発や教育を押しつけるだけではなく、市民との「協働」の視点も必要となる。

3. その他

事務局（政策経営課長）より、今後の予定について説明。

4. 閉会

事務局（環境政策部長）より挨拶。

〔了〕